

長雨の機構について

根本 順 吉

私は20年以上も昔、気象庁において長期予報を担当した経験を持つ者であるが、現在は現場から全く離れ、一市民として天候を見守る立場にある。そのため色々と疑問に思うことがあっても、これをナマの資料にもとづいて十分に解析することができない。

今夏、日本の各地にみられた多雨に関連し、気にかかるところがあるので、現場の担当者から見解をおききしたい。

新聞に掲載された長雨の続いている時の衛星写真を見ると、一つの著しい特徴がある。台風が本土の南方洋上にある場合は反時計廻りにこれに巻き込むような雲が北東にのびていることで、仮にその部分をAと呼ぶことにしよう。

台風等も含めて、地上の天気図パターンは移動してゆくのに、Aはいつまでも日本の東方洋上にへばりついて、とれない。これが関東地方等の東日本にかかれば曇雨天がいつまでも続くことになる。

一体どうしてAがとれないのか。定常波動な見方をすると、これは、戦前、田島節夫氏が注目した亜熱帯高気圧セル間の季節風前線の定着ということになるであろう。

田島氏が、梅雨の機構に関連し、気象庁の Geo. Mag. に発表した論文は現在これを顧みる人はないが、私はこの見方が大切であると思う。さらにAが日本東方沿岸部に定着したについては、広域にわたる地形や海況もこれに関与していることが想像される。

今夏の長雨に関連し、すでにエル・ニーニョとの関係が注目され、専門家の説明に、これが原因としてあげられている。そうかもしれぬが、日本の長雨に直接関係す

るのはAの東方沖上での定着である。これをさかのぼって追跡すればエル・ニーニョに到達するのだろうか。部外者からみるとAから出発してエル・ニーニョに到達したのなら原因として納得できぬこともないが、過去の事例からエル・ニーニョが原因であると言われてみてもAが執拗に定着した仕組みがよくわからない。

以上、衛星画像パターンから見た一つの特徴について述べたが、長雨を説明するためには、パターンがこうなっていたと言うだけでは不十分で、なぜ持続したかが説明されなければならない。

フィリピンのピナトゥポの大噴火の影響も含めて、大循環の異常の説明に、数多くの仮説の提出されることが期待される。

「天気編集委員会より」

根本氏の投稿に関連して、気象庁長期予報課の担当者の意見を取材したところ、次のようなコメントがありました。

『1991年秋の長雨については、TV、ラジオ等でエルニーニョ現象との関連で解説しているものもあるようだが、現場の担当者としてはそのような因果関係だけで説明をすることは考えていない。』

日本の南東海上での亜熱帯高気圧の持続や西谷の持続は、状況説明としては行われるが、何故このような場が持続したかは、残念ながら現時点では分からない。根本氏の提起している問題は、単に現場の担当者との意見交換にとどまらず、広く学問的に調査・研究すべき課題と考えている。』